

## 東広島市長者スクモ塚第1号古墳発掘調査報告 (第6次調査)

野島 永・有松 唯・宇野 真太郎  
竹田 千紘・船越 雅子

### 1. はじめに

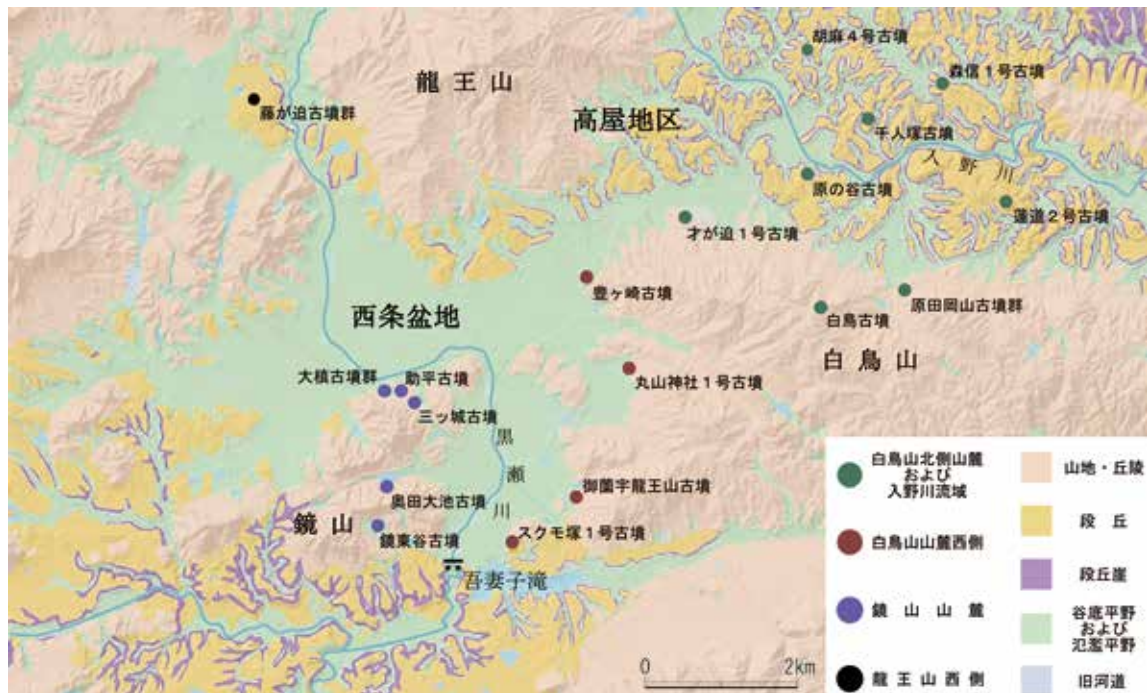
長者スクモ塚古墳群は広島県東広島市西条町御菌宇にある。以前に行った墳丘測量調査により、第1号古墳の墳丘規模は墳丘長60.0m、後円部は直径40.5～42.5m、高さ6.5～7.5m、前方部は長さ19.5m、幅20.5m、高さ0.75～1.0mほどとなり、短小型の前方部をもつ前方後円墳と想定することができた〈長者スクモ塚古墳群第1次調査（下江・永野・藤澤2018）〉。広島大学考古学研究室では一昨年度、2020（令和2）年度から墳丘形態および埴輪列の確認のための発掘調査（第5次調査）を行った。その結果、第5次調査では、南東側くびれ部付近において樹立した円筒埴輪の一部を確認した（野島・有松ほか2021）。突出した突帯をもつ円筒埴輪片には円形透孔がみられないことや、タテハケが主体となる器面調整からすれば、当該古墳の築造時期が古墳時代前期後半、4世紀中葉から後葉にまで遡るとみることも可能になった。

しかし、表採された埴輪片などからの推測が多く、墳丘形態や墳丘構造、埋葬施設も含めて、不明なところが多い。このため第5次調査に引き続いて第6次調査を計画し、長者スクモ塚第1号古墳の南東側「くびれ部」の埴輪列の検出とともに、推定前方部墳丘部分の土層確認などの調査を行った。調査期間は、2021年8月31日から9月23日までの19日間とした（長者スクモ塚古墳群第6次調査）<sup>(1)</sup>。第5次調査h-2調査区で検出した埴輪付近にさらなる調査区を設定し、埴輪樹立痕跡とその配列状況を確認することとした。（野島・有松）

### 2. 長者スクモ塚第1号古墳の周辺環境（第1図）

長者スクモ塚古墳群が所在する西条盆地は賀茂台地西部に位置し、白市面と西条面、そしてこれらを切り込んで発達する河岸段丘からなる洪積台地である。そして、吾妻子滝が上流域の侵食基準面となっているため、下方侵食が進まず平坦な沖積面が広がっている（成瀬1977）。主な河川としては盆地内を南流し吾妻子滝を経て瀬戸内海に注ぐ黒瀬川、高屋地区を源流にもち、瀬戸内海に注ぐ沼田川に合流する入野川がある。そして、高屋地区および吾妻子滝下流では段丘・段丘崖が発達している。このような地理的環境を示している西条盆地では、とくに高屋地区において開発事業に伴った調査により古墳の検出事例が多くなっているため、未確認の古墳が存在する可能性がある。よって、現時点での古墳の築造状況をそのまま当時の状況に当てはめることはできないが、以下では古墳が立地している地形について調査事例をもとに概観していきたい。

古墳時代前期には高屋地区を中心に白鳥山北側山麓傾斜面や入野川に面する段丘上に小規



第1図 西条盆地周辺の古墳分布 (1/100,000)

重ねるハザードマップポータルサイト ([https://disaportal.gsi.go.jp/maps/?ll=34.428788,132.78883&z=13&base=std&ls=hillshademap%7CchikeiBunrui50000\\_multi%2C0.8%7Ctochibunruichousa\\_list&disp=010&vs=c0j0l0u0t0h0z0](https://disaportal.gsi.go.jp/maps/?ll=34.428788,132.78883&z=13&base=std&ls=hillshademap%7CchikeiBunrui50000_multi%2C0.8%7Ctochibunruichousa_list&disp=010&vs=c0j0l0u0t0h0z0)) より転載。

模な古墳が立地している。竪穴式石室と石棺系小竪穴式石室（福永1992）を併設する才が迫第1号古墳は、白鳥山北側山麓傾斜面にあたる尾根の先端付近に立地している（大上1993）。竪穴式石室の基底部と粘土床の一部が検出された原の谷古墳は、入野川の南に位置する段丘北辺に立地する（出野上2003）。白鳥古墳は上記した古墳の立地とは異なり、白鳥山山頂付近に立地している（松崎1979、古瀬1991）。この他に直径13mの小円墳ながら竪穴式石室をもつ藤が迫第1号古墳は龍王山西側、黒瀬川に面する段丘上に立地している（河瀬1971、藤野2015a）。

古墳時代前期後半頃には、西条盆地の白鳥山西側山麓付近に古墳が築造された。長者スクモ塚第1号古墳は白鳥山南西方向にある独立した丘陵上に立地している（野島・有松ほか2021）。墳丘長43mの前方後円墳となる丸山神社第1号古墳は、白鳥山から南西に派生する丘陵の西に伸びる尾根先端部に立地している（藤野2015a、下江・村田2020）。この他、直径24mの円墳で墳丘上に箱形石棺を複数配列した千人塚古墳は入野川の北に位置する段丘平坦部に立地している（古瀬編2010）。

古墳時代中期になると、鏡山北側丘陵に古墳が築造された。墳丘長92mの前方後円墳で、後円部墳頂平坦面に3基の箱形石棺を併設する三ッ城第1号古墳は鏡山北側丘陵傾斜面に立地した（石井・三枝編2004）。円筒埴輪や朝顔形埴輪が出土した大槓第1号古墳（藤岡1993）に関しても同様の立地状況である。中期前葉の三ッ城第1号古墳以降、有力墓の築造が途絶えるが、中期後葉頃には森信第1号古墳が出現する。墳丘長30mの前方後円墳となる森信第1号古墳は入野川の北に位置する段丘北辺に立地する（石井1990）。

古墳時代後期には、新たに古墳が築造されるような目立った地域はなく、基本的に前期・中期と同様の立地状況が認められる。白鳥山山麓付近に立地する古墳としては、石棺系小竪穴式石室をもつ豊ヶ崎古墳（是光1972）や、横穴式石室をもつ御藪宇龍王山古墳（脇坂1997）、原田岡山古墳群（恵谷1994）などがあげられる。入野川に面する段丘上に立地する古墳としては横穴式石室をもつ胡麻第4号古墳（辻1990）、蓮道第2号古墳（河瀬編1975）などがあげられる。鏡山北側丘陵傾斜面に立地する古墳としては竪穴系横口式石室をもつ助平古墳（石井1992）などがある。奥田大池古墳（道上1983）、鏡東谷古墳（藤野2003）は同じく鏡山丘陵に立地する横穴式石室墳であるが、前者は鏡山南側丘陵の北辺傾斜面に立地し、後者は鏡山南側丘陵の南に伸びる尾根の先端付近に立地しており、前期・中期では認められなかった閉鎖的な空間に位置している。その他に龍王山西側、黒瀬川に面する段丘上に立地する藤が迫第3号古墳がある（河瀬1971）。

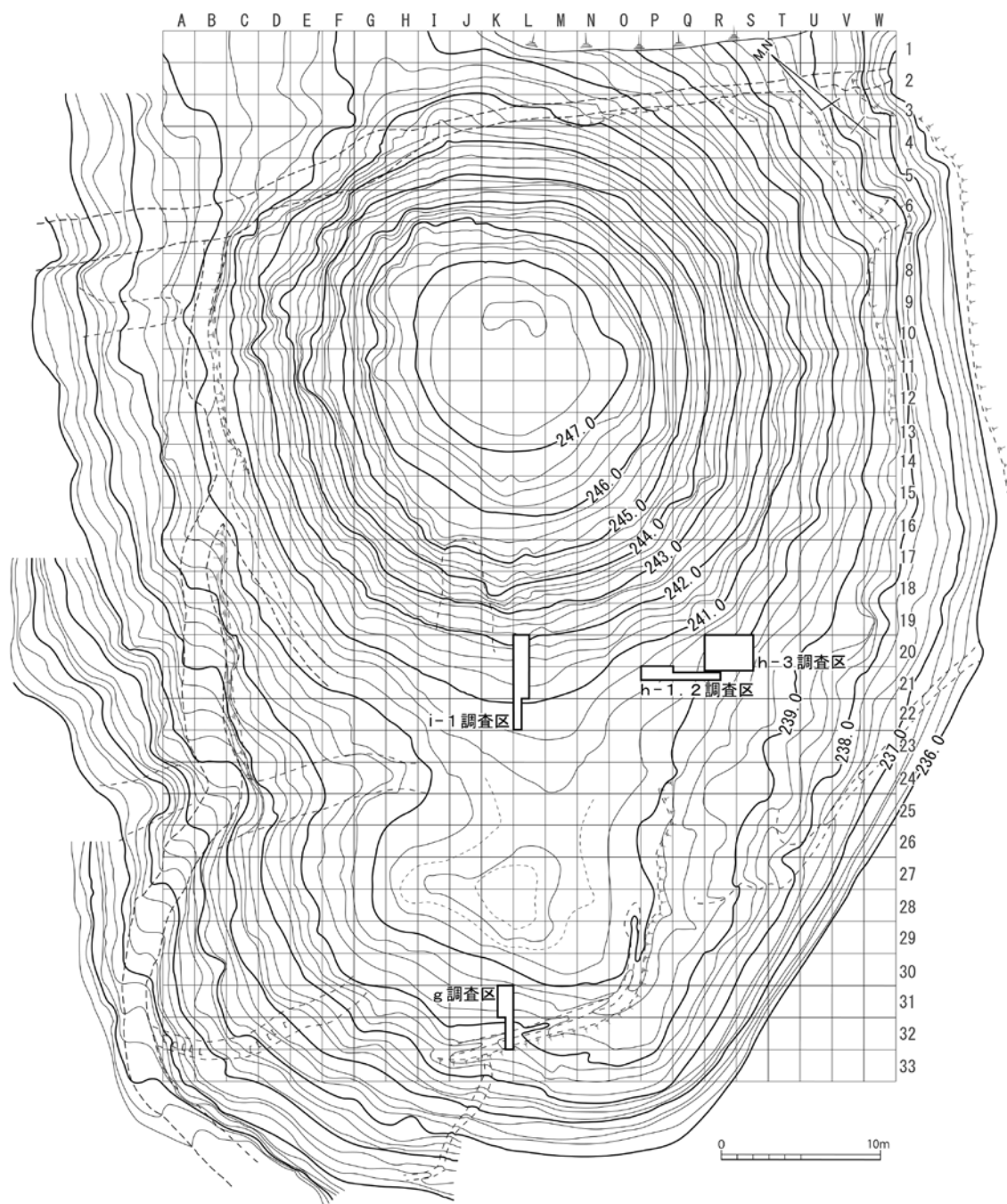
第5次調査報告内で森木琉氏が長者スクモ塚第1号古墳・丸山神社第1号古墳・三ッ城第1号古墳の3古墳を分析対象とし、それらの立地状況に関して触れている（野島・有松ほか2021）。今回は前期から後期にかけて、各古墳の立地状況について述べた。その結果、西条盆地では入野川に面して発達している段丘上や龍王山西側に所在し黒瀬川に面する段丘上、白鳥山山頂とその山麓傾斜面、鏡山丘陵傾斜面に、前期から後期にかけて古墳が築造されていることがわかる。しかし、現時点での古墳築造状況がそのまま当時を反映しているとは限らないことを勘案しても、西条盆地西側・南側の山麓付近および、段丘上には古墳が築造されないことが分布状況から読み取ることができる。（宇野）

### 3. 長者スクモ塚第1号古墳の発掘調査とその経緯

昨年度に実施された第5次調査では、第1次調査で実施した測量調査に基づき、墳形の確認を目的とした。そのため、前方部前端の墳裾と推定されるg調査区および、くびれ部と推定されるh-1・2調査区を設定した。その結果、g調査区では推定墳丘復元図（下江・永野・藤澤2018）の前方部前端部にあたる地点で盛土層を確認し、h-1・2調査区では円筒埴輪と礫を検出した（野島・有松ほか2021）。

今年度は昨年度確認できなかった埴輪の配列状況の検出とくびれ部の位置の確定を行う必要があった。また、前方部盛土層が検出できたという確証を得られなかったため、前方部の有無および盛土の堆積状況を確認する必要があった。そのため、昨年度にh-2調査区で検出した埴輪の取り上げと、想定される埴輪列と石列の検出を目的とし、h-1・2調査区で検出した礫から延直線状に拡大して東側にh-3調査区を設定した。また前方部の有無の確認と盛土の堆積状況の確認を目的とし、g調査区の北東側に後円部と前方部の盛土層の連結部と想定されるi-1調査区を設定した（第2図）。

長者スクモ塚古墳群第6次調査は、2021年8月31日から9月23日に行った。8月31日からh-3調査区、i-1調査区付近の樹木の伐採や清掃を開始し、9月1日にはi-1調査区の掘削を開始した。また、h-2調査区の埋土を除去し、土層の再確認を行った。9月2日



第2図 長者スクモ塚第1号古墳調査区配置図 (1/500)

にはh-3調査区の掘削を開始した。表土層と流出土層を掘削し、遺構面を検出した。掘形の検出に努めたが、h-2調査区で検出した埴輪（埴輪1）以外にはみられなかった。当初は石列を検出していると考えたが、石列と想定していた中に石詰めの遺構2基があった。石詰めの遺構からは原位置を保った埴輪の基底部は出土しなかった。しかし、h-2調査区で検出した埴輪に石詰めが行われていることや墳裾との位置関係から踏まえると、埴輪樹立痕跡（埴輪2・3）であると判断した。埴輪列と石列が確認できたと考え、調査区全体の平面

図の作成と写真撮影を行った。個別に埴輪樹立痕跡ごとに掘り下げ、図化を行った。埴輪2・3に関しては表土下近くの礫の実測ののちに、上部の礫を取り外した。下部に礫が複数あったため、さらに実測を行った。9月9日にはi-1調査区は盛土を平面検出しようと試みたが、盛土層が判断できなかった。そのため、断割りを行ったところ、後円部の盛土層と前方部側の中世土器包含層を確認した。そして、前方部側の土層の堆積状況の確認のため、さらに断割り部を南東側に拡張した。拡張部の掘り下げを行うと、i-1調査区の南西部では、埴輪片および、礫の集中部を検出したため、平面図の作成を行った。9月15日にはh-3調査区の北側を断割り、埴輪3の半裁状況と土層堆積状況の確認を行い、土層断面図の作成を行った。また断割りの結果、埴丘盛土層が確認できたため、土層断面図の作成を行った。9月23日には調査区発掘停止面にマイラーフィルム片を残して、排土と真砂土で埋め戻した。

(竹田)

#### 4. 長者スクモ塚第1号古墳の調査区 (第6次調査)

##### (1) h-3調査区 (図版第1、第3図)

###### a. 調査区設定

h-3調査区は埴輪列検出および、くびれ部の位置を確定することを目的として設定した。仮定的な埴丘主軸上のp.Q20を東端に長さ2.5m、幅3mの範囲とした。また、h-3調査区の東壁から幅0.5mを断割り、平面検出した土層堆積状況および、埴輪3の石詰め状況を断面で確認した。

###### b. 土層堆積状況 (図版第1、第3図)

表土下には、調査区の全面にわたって盛土流出土(第28・72層)が堆積していた。流出土の下には、盛土(第26・70・71層)および整地土(第31層)、置土(第32層)<sup>(2)</sup>、さらにその下では地山(第6層)を確認した。

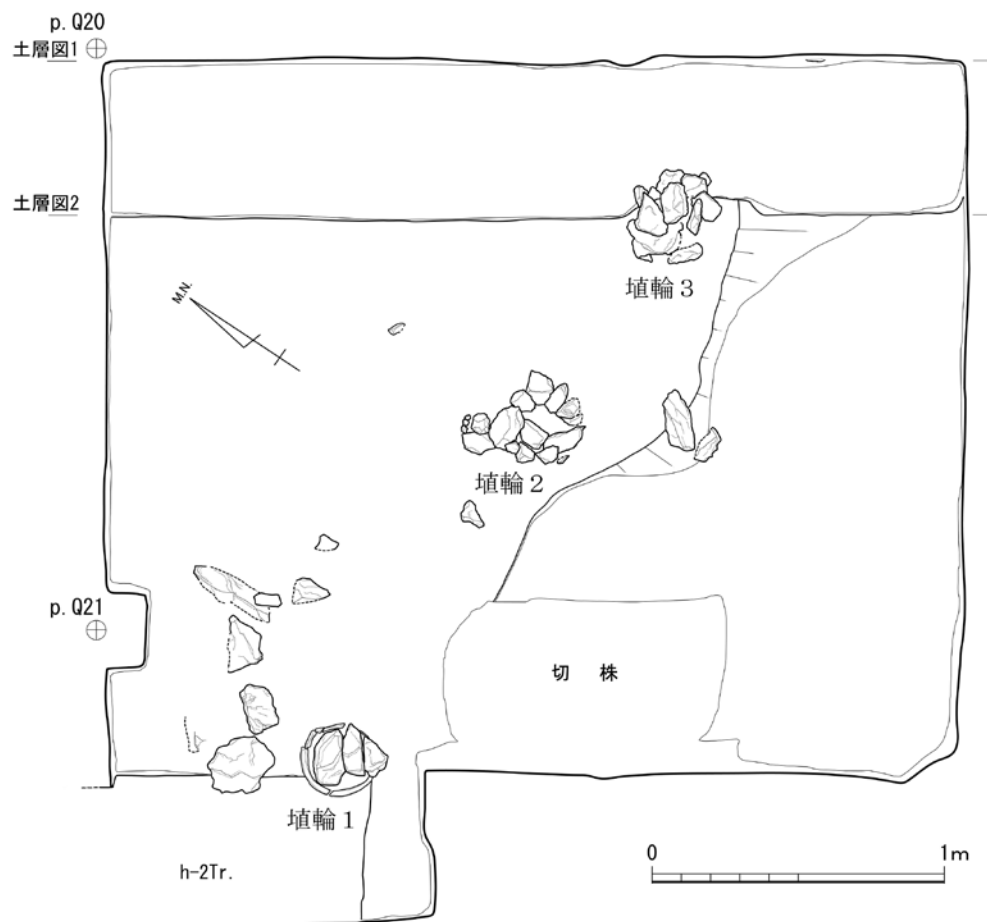
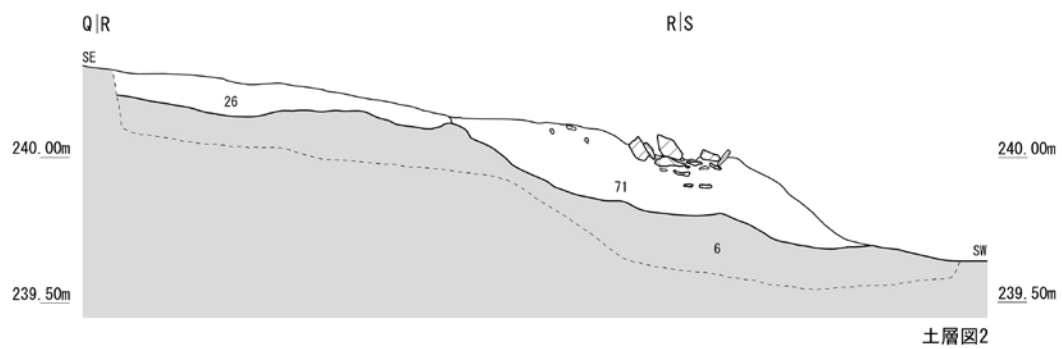
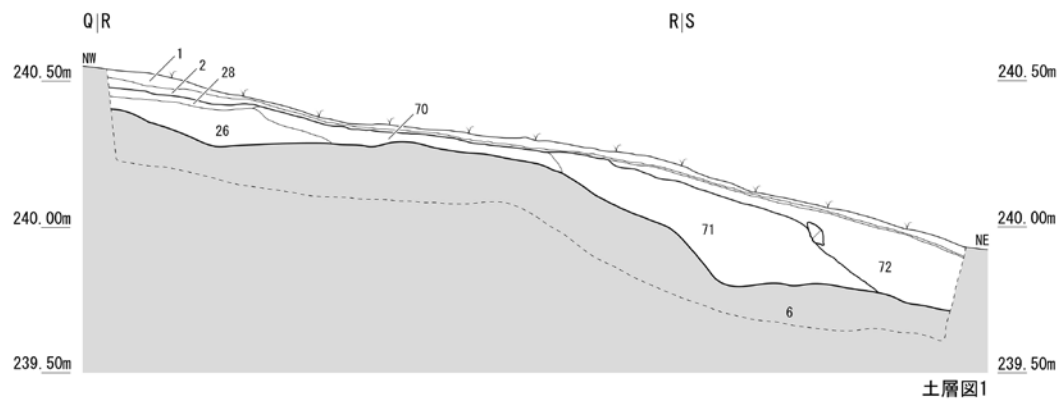
流出土からは多量の埴輪片と土器片が出土した。また、調査区の北側から断割りを行った結果、盛土は第26層、第70層、第71層の順に構築している状況が確認できた。平面的に盛土層と地山の境目を確認したほか、断割りによって盛土の落ち込みがみられたことから、埴裾を確認したと想定できる(図版第1b、第3図)。

(船越)

##### (2) i-1調査区 (図版第4・5、第4図)

###### a. 調査区設定

第5次調査でg調査区により前方部前端にあたる地点に盛土層を検出したものの、古墳時代の層であると確証を得られず、円墳の可能性があった。そのため、i-1調査区を設定し、前方部の有無の確定を目的として土層堆積状況の確認を行った。前方部中軸線上となるp.K21を南北に通るグリッドライン上に長さ4m、幅1mの調査区を設定した。p.K21のラインから幅0.5mで断割りを行った。しかし、平面で土層の確認をしながら掘り下げができなかったことにより、断割りの土層を確認しても前方部の盛土層が未確定であった。そのため、p.K21のラインからさらに南側に2m、幅0.5mの断割りを延長し、改めて盛土の堆積状況の

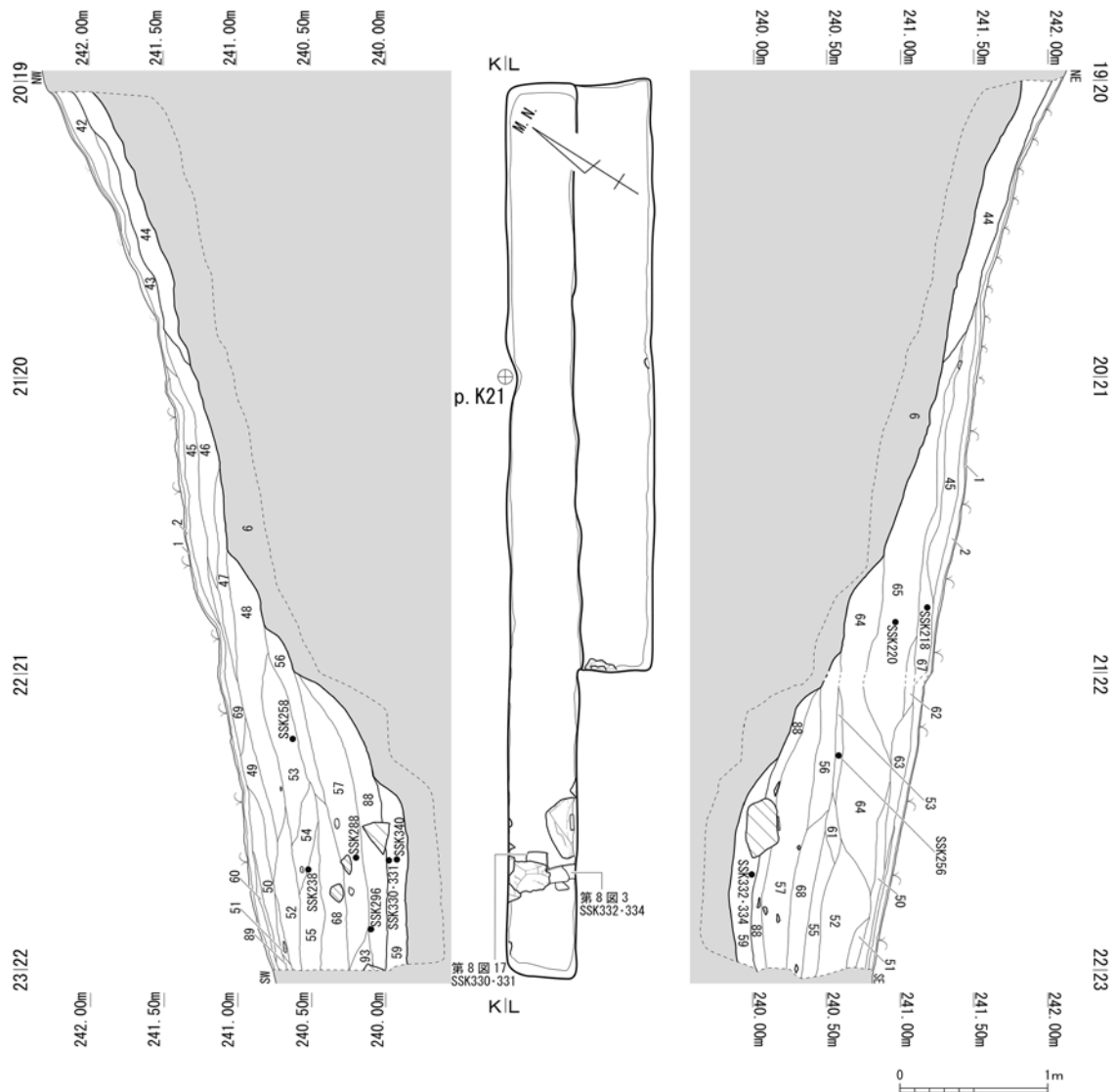


第3図 長者スクモ塚第1号古墳調査区h-3調査区平面図・土層図 (1/20)

確認を行った。

**b. 土層堆積状況 (図版第4・5、第4図)**

表土(第1層)、自然堆積土層(第2層)下には流出土層(第42・45層)、後世の旧表土層(第43・50・67層)と後世の改変に伴った堆積土層(第46~49・51~57・60~65・68・69・88・93層)を確認した。後世の改変に伴った堆積土層は当初前方部盛土ではないかと想定した。しかし、埴輪片のほかに第59層より上の層から土師質土器片(図版第6 a-2・21、第7図2)が出土したことから、長者スクモ塚第1号古墳の埴丘盛土ではないことが判明した。また、第59層からは埴輪片のみが集中的に出土した(図版第4 b)。p.K21より北側は流出土層(第42層)の下に後円部盛土層(第44層)を確認した。p.K21より南側は後世の複数回の改変に伴った堆積土層の下位で、前方部盛土層(第59層)<sup>(3)</sup>を確認した。その下は全面地山(第



第4図 長者スクモ塚第1号古墳調査区 i-1 調査区平面図・土層図 (1/50)

6層）である。後世の改変に伴った堆積土層（第53・54層）から、土師質土器であるSSK256（図版第6 a）とSSK238（図版第6 a、第7図2）が出土した。第53・57・65・88層から、SSK258（図版第6 b、第8図6）、SSK288（図版第6 b、第8図15）、SSK220（図版第6 b、第8図4）、SSK296（図版第6 b、第8図11）の埴輪片も出土した。後世の旧表土層（67層）から、SSK218（図版第6 b、第8図18）が出土した。また、前方部盛土層（第59層）から、SSK332・SSK334（図版第6 b、第8図3）、SSK340（図版第6 b、第8図13）、SSK330・SSK331（図版第6 b、第8図17）が出土した。第59層下位の古墳築造の際の地山の削り出しのほかに、古墳時代より後の時期で数回掘り込まれ、地山まで達する改変が3回確認できた（図版第5 b）。後世の改変を大きく受けていたが、調査区北側に地山土を多く含む後円部の盛土層、調査区南側に前方部の盛土層を確認した（図版第5 a、第4図）。

### （3）検出遺構（図版第2・3、第3・5・6図）

h-3調査区の石列は埴輪1の北西側、北東から南西に向けて一列に配列された状態で検出した。石列の石材は長さ80cm、すべて角礫の花崗岩である<sup>(4)</sup>。

また、昨年度h-2調査区で検出した樹立した状態の埴輪1基（埴輪1）（野島・有松ほか2021）のほか、円筒埴輪の内部に詰められた礫（埴輪2・3）を検出した（図版第1 a・2・3、第3・5・6図）。しかし、埴輪2・3に関しては原位置を保った円筒埴輪の基底部はなかった。埴輪2・3の石詰めは2段に積み重なった状態であり、表土下近くの礫の実測（第5図平面図a）ののちに、上部の礫を取り除き、下部の礫の実測（第5図平面図b）を行った。

#### a. 埴輪1（図版第2 a・3 a、第5図左）

底部径22.3cmの埴輪1内部では、大ぶりの角礫3点を検出した。南東側の角礫2点は接合し、墳丘外側に倒れこんでいることから、もともとは埴輪にたてかける形で設置していたと想定できる。第5次調査でのh-2調査区の断割りの結果を踏まえると、埴輪1は地山を浅く掘りくぼめたのちに、埴輪を設置し、埴輪内外に土を充填し（野島・有松ほか2021）、そののちに石詰めを行っているとは想定できる。石材は花崗岩である。

#### b. 埴輪2（図版第2 b・3 b、第5図中央）

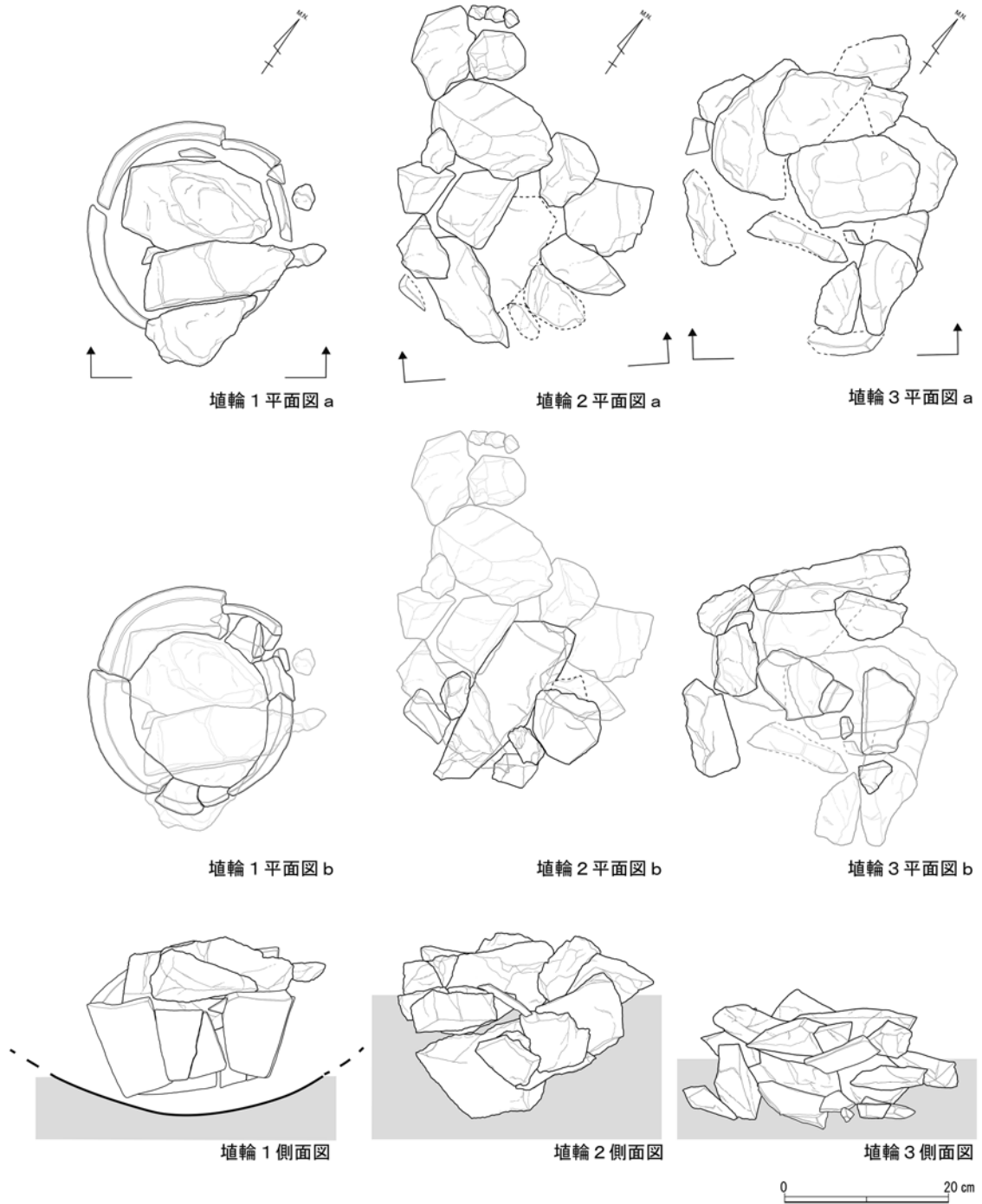
埴輪2は複数の角礫が組み合った状態で検出した。左右両方から円環上に組み合った礫の下に、大ぶりの角礫1点と周りに小礫を検出した。埴輪2では平面検出を行ったが、掘形はなかった。そのため、後円部盛土層の構築と同時に埴輪を設置し、石詰めを行っているとは想定できる。石材は花崗岩が主で、2石のみ流紋岩である。

#### c. 埴輪3（図版第2 c・3 c、第5図右）

埴輪3は横倒しになった複数の扁平な礫の下に少数の小礫を検出した。埴輪3では断割りを入れて石詰めの状況および土層の確認を行ったが、掘形はなかった（第6図）。そのため、後円部盛土層の構築と同時に埴輪を設置し、石詰めを行っているとは想定できる。石材は花崗岩である。

埴輪間の距離は、中心間で埴輪1と2で0.8m、埴輪2と3で1.4mとなり、列間隔として





第5図 長者スクモ塚第1号古墳調査区埴輪1・2・3平面図・側面図 (1/8)

(平面図bの灰色の線は一段階前の石詰めの様子を示す)

は疎な配置である。埴輪列は西から東側にかけて墳裾にそって弧を描いて配置しているため、くびれ部に近い後円部裾部であることが推定できる。埴輪2・3ともに、埴輪1の底部径より礫のちらばりが大きいことや樹立した埴輪がなく、検出した状況は埴輪の中にあつた礫が

倒れこんでいる状態であると想定できる。石列と埴輪内に詰められた石材は主に地山に含まれた花崗岩を使用していた。埴輪1は土を充填し、角礫2点を埴輪にたてかけることで固定を行う。一方で、埴輪2・3は掘形がなく、複数の角礫による石詰めのみで固定する。こうした設置順序は埴輪の倒壊を防ぐためのものであったと想定できる。



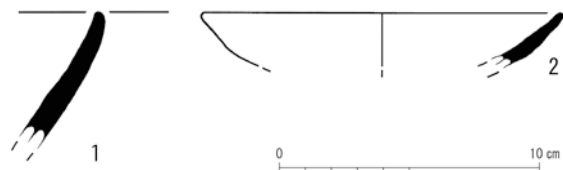
第6図 長者スクモ塚第1号古墳埴輪3断割り状況  
(東上から)

## 5. 出土遺物とその年代（図版第6～8、第7・8図）

第6次調査で出土した遺物には円筒埴輪片・土師器片・土師質土器片があり、破片数にして200点あまりが出土した。小片が多く、調整などの残存状況が良好なものは少ないため、このうち図化できた20点を掲載した。h-3調査区では埴輪1～3の埴輪樹立痕跡が検出でき、埴輪1は原位置を保つものと考える基底部分(20)が確認できた。埴輪2・3に関しては原位置を保つ埴輪は残っていなかったが、埴輪内部に詰めた礫群に混じって埴輪片(19)が確認できた。その他多くの埴輪片は流出土(第28・72層)に含まれていた。また、i-1調査区では、後世の改変に伴った堆積土層(第46～49・51～57・60～65・68・69・88・93層)から埴輪片(4・6・11・15)と共に土師質土器坏片(2)、底面に回転糸切り痕がみられる土師質土器片(図版第6a-21)が出土した。そして、古墳時代の盛土層(第59層)からは埴輪片のみが出土した(図版第4b、第8図3・13・17)。

### (1) 土師器・土師質土器（図版第6a、第7図）

1は残存率が1/30となっているため、口径は復元することができない。内外面ともに磨滅しており、調整は観察が困難である。色調は黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は0.5～1.0mmの長石・石英などが含まれる。やや厚手で口縁端部は丸みをもち、若干ではあるが口縁部全体が内湾していることから古墳時代前期のものと考える。2は土師質土器坏の口縁部片で、口縁部復元径は14.1cmである。外面には不明瞭ながら回転ナデの痕跡が確認でき、内面は磨滅しており調整は不明である。色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は0.5mm以下の石英などを含む。底部までは残存していないが、推定する器高から深さが浅い形態をしていると考える。口径が14cm程度で深さが浅い形態をしている坏は、西条盆地では13世紀に主要な組成となる(吉野1998、藤野2015b)ことから、同様の年代が該当すると考える<sup>(5)</sup>。21は土師質土器の底部片である。器種は不明で、底面には不明瞭であるが回転糸切り痕が確認できる。体



第7図 長者スクモ塚第1号古墳出土  
土師器・土師質土器 (1/3)

部まで残存していないため底部と体部との接合部分の形状に関しては不明であるが、外面の接地面際までナデ調整がおこなわれている。色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は1mm以下の石英を含む。

## (2) 埴輪 (図版第6b・7・8、第8図)

### a. 朝顔形埴輪

3・4・8は二次口縁の破片である。3は口縁部突帯まで残存しており、口縁部は緩やかに外反しその中間付近に突帯をめぐらしていると考えられる。内面には粘土紐接合痕跡が確認できる。外面調整は不明瞭ながらタテハケののちにヨコナデが施されており、内面調整は断続的なヨコハケが施されている。4は口縁部が緩やかに外反しており、口縁端部は粘土紐を貼り付けることによって端面をつくりだしている。調整は外面に不明瞭ではあるが、わずかに右上がりのヨコハケが確認できる。内面に関しては器壁の剝落が顕著であるため観察困難である。8は口縁部が緩やかに外反しており、口縁端部は粘土紐を貼り付けることによって端面をつくりだしている。磨滅が激しく内外面共に調整は不明である。

### b. 円筒埴輪

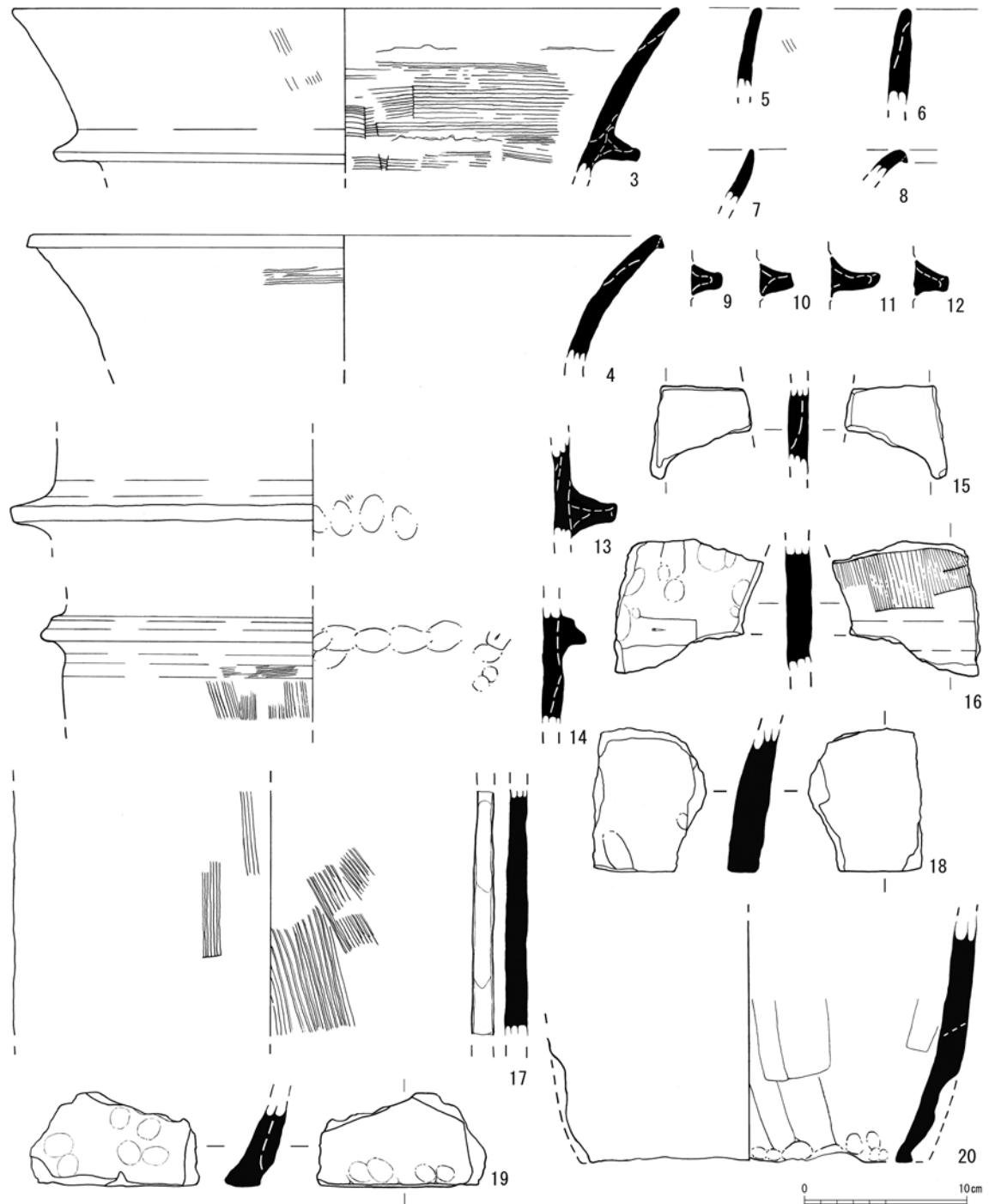
5～7は口縁部片であるが、いずれも細片であり残存率が1/8より下回るため、口径を復元することはできない。5は口縁部が端部付近で緩やかに外反している。調整は外面に不明瞭だがタテハケが確認でき、内外面共に口縁端部付近にヨコナデが施されている。6は口縁部が垂直気味に立ち上がっている。調整は内外面共に口縁端部付近にヨコナデが施されている。7は口縁部が外開き気味になっている。外面調整は磨滅しており不明であるが、内面調整に関してはヨコナデが施されている。

9～12は円筒部分から剝落した突帯片で、13・14は突帯をもつ胴部片である。9・10・12・13は断面が台形状を呈しており、突帯上辺および下辺にヨコナデが施されている。13は突帯端面のナデに対応する形で内面にオサエが確認できる。11は幅が細く突出が高くなっており先端部は丸く収まっている。14は断面がM字状を呈しており、外面調整は不明瞭であるがタテハケ・ヨコハケののちに突帯を円筒部分に貼り付けるためのヨコナデが施されている。内面調整は突帯端面のナデに対応する形でオサエが確認できる。

15～17は透孔をもつ胴部片で、透孔の形状は15・16が斜辺をもつものである可能性が高く、17は13.6cm以上の方形状の透孔である可能性が高い。15は内外面共に磨滅しており、調整は不明である。16は突帯が付いていた痕跡がある。外面調整は左肩上がりのタテハケが左から右にかけて施されている。17は透孔を穿孔する際の切削の痕跡が3回確認でき、下から順に切削をおこなっている。外面調整はわずかにタテハケが認められ、内面調整は左肩上がりのタテハケ・板ナデが確認できる。

18～20は底部片であるが第1突帯まで残存しているものはなく底部高は不明である。いずれも底部端に調整をおこなっており、特に19は内外面共にオサエの痕跡があり、それぞれが対応するように施されている。20は唯一底部が全周し、底部径は22.3cmである。外面は大部分が剝落しており観察が困難であるが、内面には8cmの高さで粘土紐接合痕跡が認められる。

その粘土紐接合痕跡と同じ高さで擬口縁状に平滑面を呈する箇所が確認できることから、幅8cmの粘土板を用いた基部成形をおこなっていたと考える。そのため、基部成形後に一定の乾燥期間を設けたことが想定できる。



第8図 長者スクモ塚第1号古墳出土埴輪 (1/4)

第1表 長者スクモ塚第1号古墳出土遺物観察表

掲載 番号	出土地点	種類	器種	部位	法 量 調 整 色 調				備 考
					器高 [現存値]	口 径 胴部径 底径 [復元値]	外面	内面	
1	h-3調査区	土師器	不明	口縁部 [5.3]				7.5YR8/8 5YR7/8	SSK207
2	h-3調査区 i-1調査区	土師質土器	坏	口縁部 [2.1] [14.1]		ナテ		10YR8/4 10YR8/4	SSK230・238接合、第54層
3	i-1調査区	埴輪	朝顔形	口縁部 [10.0] [40.8]	タテハク・ヨコナテ	ヨコハク		7.5YR7/6 7.5YR7/6	SSK332・334接合、第59層
4	i-1調査区	埴輪	朝顔形	口縁部 [7.8] [38.8]		ヨコハク		10YR6/4 10YR6/3	SSK220、第65層
5	h-3調査区	埴輪	円筒	口縁部 [4.9]	タテハク・ヨコナテ	ヨコナテ		7.5YR8/6 7.5YR8/6	SSK177、黒斑有
6	i-1調査区	埴輪	円筒	口縁部 [5.9]	オサエ・ヨコナテ	ヨコナテ		7.5YR7/6 7.5YR7/6	SSK258、第53層
7	i-1調査区	埴輪	円筒	口縁部 [2.2]		ヨコナテ		10YR8/6 10YR8/6	SSK311、排土
8	h-3調査区	埴輪	朝顔形	口縁部 [1.9]				10YR8/4 10YR8/4	SSK323
9	h-3調査区	埴輪	円筒	突帯 [1.9]				10YR6/6 2.5YR5/4	SSK176・200接合、黒斑有
10	h-3調査区	埴輪	円筒	突帯 [2.0]				2.5YR5/6 2.5YR4/2	SSK212、黒斑有
11	i-1調査区	埴輪	円筒	突帯 [2.2] [27.8]				10YR8/6 10YR8/6	SSK296、第88層
12	h-3調査区	埴輪	円筒	突帯 [2.1] [28.0]				5YR6/6 2.5YR5/6	SSK337
13	i-1調査区	埴輪	円筒	胴部 [6.1] [33.0]	ヨコナテ	ナテ・オサエ		7.5YR7/6 7.5YR6/6	SSK340、第59層
14	h-3調査区	埴輪	円筒	胴部 [7.0] [30.3]	タテハク・ヨコハク・ヨコナテ	オサエ・ケスリ	5YR6/6	7.5YR5/6	SSK321・353接合、黒斑有
15	i-1調査区	埴輪	円筒	胴部 [5.9] [33.6]				7.5YR7/6 5YR7/8	SSK288、第57層
16	h-3調査区	埴輪	円筒	胴部 [7.6] [24.0]	タテハク・ヨコナテ	オサエ・ケスリ	10YR6/8	7.5YR7/6	SSK342、黒斑有
17	i-1調査区	埴輪	円筒	胴部 [15.0] [31.6]	タテハク	タテハク・板ナテ	7.5YR8/8 7.5YR7/6	SSK330・331接合、第59層	
18	i-1調査区	埴輪	円筒	底部 [8.8] [23.0]		オサエ	7.5YR7/6 2.5YR7/6	SSK218、第67層	
19	h-3調査区	埴輪	円筒	底部 [5.8] [19.9]	オサエ	オサエ	7.5YR8/6 5YR7/8	SSK358、埴輪3	
20	h-3調査区	埴輪	円筒	底部 [16.0] 22.3		オサエ・ケスリ	10YR8/6 5YR7/8	SSK351、黒斑有、埴輪1	
21	i-1調査区	土師質土器	不明	底部				10YR8/4 10YR8/4	SSK256、第53層 図版第6a記載 実測図なし

c. 焼成・色調・胎土

表面が磨滅している個体が多いが、焼成は良好である。色調は大部分が橙色を呈しており、胎土には1.5mm以下の石英・長石などが含まれている。胎土には著しい差異は見いだせない。

d. 年代

第6次調査で出土した円筒埴輪片は黒斑をもち（5・9・10・14・16・20）、透孔は斜辺をもつもの（15・16）や方形状のもの（17）で、円形透孔は確認できない。調整は外面タテハクを主体とする。これらの様相はⅡ群円筒埴輪の特徴であると考え（廣瀬2015）。また、底部が全周するもの（20）に関しては、粘土紐接合痕跡と平滑面を呈する箇所が高さ8cmの位置に確認できる。このことにより、廣瀬氏がⅢ群の要素としている「通常よりも太めの粘土紐を用意し」基部を成形する「粘土帯基部成形」と呼称した方法（廣瀬2015）を用いてい

ると考える。一方で、廣瀬氏がⅠ・Ⅱ群の要素であるとする「粘土板基部成形」がとられる際におこなう基部成形後の乾燥期間がおかれた可能性がある。さらに、内面に粘土紐接合痕跡を跨いでケズリが施されていることから、20はⅢ群につながる要素をもつⅡ群新相の埴輪の可能性もある。以上から、第6次調査出土円筒埴輪の年代は、第5次調査成果報告（野島・有松ほか2021）と矛盾はなく古墳時代前期後半と考える。（宇野）

## 6. 長者スクモ塚第1号古墳の調査成果（第6次調査）

### （1）長者スクモ塚第1号古墳の埴輪の諸特徴

第6次調査では埴輪1～3の埴輪樹立痕跡を確認することができた。埴輪1には第1突帯まで残存していない全周する底部（図版第8、第8図20）が、埴輪2・3では埴輪内に詰められた礫群に混じった埴輪片が確認できたことは上述した通りである。埴輪2で出土した埴輪片は2点と数が少なく、部位が明らかな資料は出土していない。埴輪3では底部片（図版第7b、第8図19）など11点が出土した。埴輪1・3では底部資料が出土しており、底部端の調整として内外面にオサエが施されている。しかし、埴輪1・3ではオサエの手法が異なっている状況を確認できる。以下ではその手法の差異について述べていきたい。

まず、埴輪1で出土した底部が全周するものに施されるオサエは内面下端にみられ、オサエの単位はそれぞれが重複し合い明瞭に残る。一方、外面に関しては大部分が剥落しており不明瞭であるがオサエの痕跡は残っていない。推測の域を出ないが、外面に支持具として板状工具を当て、内面に親指以外の指の先端を押し当てて底部付近に押圧を加えていると考える。また、内面オサエは一部底面から加えられている箇所があり、おそらくは倒立状態で施されたと考えられる。

次に、埴輪3で出土した底部片は外面下端に横方向に強くナデた痕跡が確認できる。内外面にそれぞれ対応するようにオサエが確認できたが、オサエの単位は不明瞭である。内面に親指を、外面に残りの指を器壁に当て挟み込むように押圧を加えており、倒立状態で施されたか正立状態で施されたかは不明である。若干底部が湾曲しており、これは自重によるものと考えられることができる。こうしたことからオサエは自重で変形した器壁を補正する意図があったと想定できる。

これらの痕跡から埴輪3出土底部片でのオサエは回転力を利用し施されていたと考え、埴輪1出土資料でのオサエは回転力を利用せずに施されたと考えられる。ちなみに、i-1調査区で出土した底部片（図版第7b、第8図18）は、内面にオサエが施されるが、外面にオサエは確認できなかった。埴輪1出土底部と同様の調整であると考えられる。（宇野）

### （2）長者スクモ塚第1号古墳における埴輪突帯片の分類

広島大学考古学研究室には、1940年代から長者スクモ塚古墳群周辺で表面採集された埴輪破片が木箱3箱に保管されてきた。昭和のころには広島市東千田町にキャンパスがあり、学生諸氏は東広島市（当時、賀茂郡西条町）に所在する安芸地方最大の前方後円墳である三ツ城古墳の見学の折、長者スクモ塚古墳群にも訪れていたらしい。埴輪片とともに保管されて

いるラベルを見れば、古墳に興味のある学生たちがその都度に埴輪を表採していたことがわかる。簡単な墳丘図を描いて表採場所の位置を示しているラベルもあった。そのほとんどが長者スクモ塚第1号古墳の南東側「くびれ部」か、後円部墳丘裾付近であった。測量段階では、その一部を紹介したが（下江・永野・藤澤2018）、今回それら表採保管された円筒埴輪片と出土埴輪片の突帯部分に共通の特徴があることが判明したことから、これまで未発表であった表採資料も一括し、突帯部分の断面からみた形状をもとに分類をおこなっておきたい。

すでに本古墳の測量調査成果を紹介した下江裕貴氏は、表採されていた朝顔形埴輪・円筒埴輪片を分類するにあたって、突帯の断面形状の差異に着目し、「突帯の先端の形状が角ばっているものをⅠ類、丸みを帯びているものをⅡ類、M字状を呈するものをⅢ類」とした（下江・永野・藤澤2018、55頁）が、突帯の接合方法については観察に及ばなかった。よって、下江氏の分類と既出実測図を一部修正し、突帯を形成する粘土紐の接合方法と断面形態によって、同様に3つに再分類しておきたい<sup>(6)</sup>。

#### a. 朝顔形埴輪・円筒埴輪突帯Ⅰ類

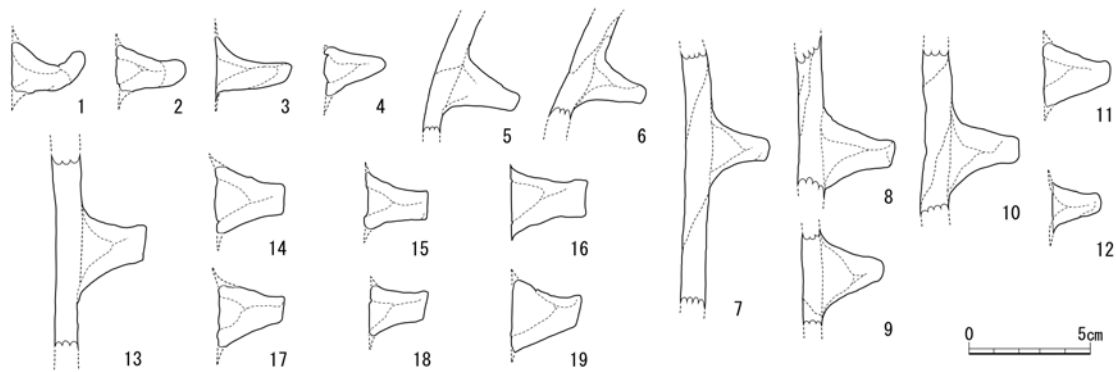
最も突帯高が高い一群である。先端部分が丸くなるⅠa類と、先端部がやや角張るが、丸みのある端面をもつⅠb類に細分できる。

**Ⅰa類**（第10図1～4） これまでの表採・出土資料のなかではわずかだが、先端部が丸くなる突帯がある。突帯高は2.5～3.0cm前後と突出する。突帯基部の中央の粘土紐を上下で覆い、さらにその先端部を別の粘土紐で伸ばして丸くおさめているようである。断面から推測される粘土紐・補填粘土片はおそらく3、4つあり、これを貼り合わせて突帯を作り上げる（第9図）。小型埴輪に付設されたとみられ、上方に屈曲する例（第10図1）も確認できた。受口状突帯に系譜をもつ資料<sup>(7)</sup>とも思え、小型の朝顔形埴輪あるいは壺形埴輪に付設されたものかもしれない。しかしⅠa類自体いずれも円筒部器体から剥落して出土したため、どのような器種に貼り付けられていたのかは不明といわざるをえない。

**Ⅰb類**（第10図5～12） 薄く伸び、やや丸みを帯びた端面をもつ。突帯高はⅠa類に次ぎ、2.0～3.0cm、平均2.6cm前後となる。Ⅰa類同様、突帯基部中央に円筒部器壁面に最初に貼り付けた粘土紐があり、その上下に粘土紐を貼り合わせて突帯を形成する。剥がれた突帯の接着面を観察すると、最初に貼り付けた基部中央の粘土紐は最も強く接着されていた。人差し指と親指をすり合わせるようにして指先で強く撫でつけたとみられる。その後上下から2本の細い粘土紐を貼り合わせて突帯を形成する。上辺の粘土紐の上面を指頭によって強く撫でつけることで中央の粘土紐と密着させたようであり、突帯先端部近くに浅い窪みが観察できる場合が多い。おそらくは人差し指か中指先端を突帯



第9図 突帯貼付面の粘土紐接合痕跡  
（第10図2（SSK365）・4（SSK70））



第10図 長者スクモ塚第1号古墳出土朝顔形埴輪・円筒埴輪突帯断面模式図（1）

1.SSK28 2.SSK365 3.SSK296 4.SSK70 5.SSK17 6.SSK332・334 7.SSK22 8.SSK340 9.SSK23 10.SSK13  
11.SSK10 12.SSK2 13.SSK16 14.SSK30 15.SSK105 16.SSK3 17.SSK91 18.SSK36 19.SSK15

上辺先端付近に押し当て、親指の腹全体を広く突帯下辺に押しあてて圧迫しつつ横方向に撫でつけていたと想定できる。強い指ナデによる調整がI b類の特徴といえる。上下に付加された粘土紐が器壁から離れていた突帯片もあることから、上下の粘土紐を器壁に強く圧着させてはいなかったようにも思える。さらに先端部を形成するためにわずかな粘土紐を付加させた例もあるが、端面上下端を丸く撫で上げることで密着させたとみられる。円筒部内径はおよそ28～30cmとなる。

I a・b類はともに円丘部南西裾部にあたるi調査区最下層から出土した資料と表採されたものがある。埴丘南西の「くびれ部」に設定したh調査区からは出土してはいない。

#### b. 朝顔形埴輪・円筒埴輪突帯Ⅱ類（第10図13～19）

台形に近い断面形を持ち、先端部端面が平坦になることから、板ナデにより整形された一群とすることができる。平均2.6cm前後の突帯高をもち、突帯基部中央となる粘土紐を貼りつけ、その後やはり上下から2本の細い粘土紐を貼り合わせて突帯を形成する。I b類同様に最初に貼り付けた基部中央の粘土紐は最も強く接着されている。人差指と親指をすり合わせるようにして、強く密着するように器壁面に撫でつけたとみられる。その後基部粘土紐を覆うように上下の粘土紐を貼り合わせ、I b類同様に人差し指か中指先端を上辺先端付近に押し当て、親指全体を広く下辺に押しあてて横方向に撫でつけたと想定できる。しかし、先端部に新たな粘土紐を付け足すものはみられない。先端部端面を板状の工具で平滑に撫であげて整形しているところも異なる。

なお、Ⅱ類は後円部埴丘西側周辺から採集されたものしかない。また、円筒部器壁面への押圧貼り付けが弱かったためか、円筒部から剥落した小片資料しかなく、円筒部の規模さえ推測することが難しい。後円部埴丘西側付近、あるいは墳頂平坦部西側周囲に樹立された円筒埴輪の突帯部と想定することができよう。

これらI・Ⅱ類の突帯は以前に赤塚次郎氏が「粘土紐を器壁に貼り付けた後、その下部にさらに粘土を補充する製作法」として「補充技法」と名付けた製作技術に類似する（赤塚1979）。奈良盆地の円筒埴輪のI期第1段階に特徴的な限定的技法とした。その後、赤塚氏



第2表 長者スクモ塚第1号古墳出土朝顔形埴輪・円筒埴輪突帯一覧

挿図 番号	長者スクモ塚 古墳遺物番号	類 型	出土位置	突帯高 (cm) 〔現存高〕	復元推定直径 (cm)	器壁内面調整	出土時期	備 考
1	SSK28	I a	表 採	2.9	—	—	—	小型朝顔形埴輪か
2	SSK365	I a	表 採	2.8	—	—	—	
3	SSK296	I a	i-1調査区	3.0	—	—	2021年9月11日	
4	SSK70	I a	表 採	2.5	—	—	—	
5	SSK17	I b	表 採	2.6	内径推定31.1	内面ヘラクス <sup>リ</sup> +ナ <sup>テ</sup>	—	朝顔形埴輪口縁部
6	SSK332・334	I b	i-1調査区	2.4	口縁部推定38.0	内面断続ココハ	2021年9月17日	朝顔形埴輪口縁部
7	SSK22	I b	表 採	2.3	内径推定29.2	内面ヘラクス <sup>リ</sup>	—	
8	SSK340	I b	i-1調査区	3.0	内径推定31.0	内面ヘラクス <sup>リ</sup> +板ナ <sup>テ</sup> +指頭痕	2021年9月19日	
9	SSK23	I b	表 採	2.4	内径推定30.0	内面ヘラクス <sup>リ</sup>	—	
10	SSK13	I b	表 採	2.7	内径推定27.0	内面ヘラクス <sup>リ</sup>	—	
11	SSK10	I b	表 採	2.8	—	—	—	
12	SSK2	I b	表採 (第1号古墳 後円部西側斜面)	[2.0]	—	内面ヘラクス <sup>リ</sup>	2016年8月20日	墳丘測量時 (第1次調査) 採集
13	SSK16	II	表 採	2.5	内径推定28.8	内面ココハ	—	
14	SSK30	II	表 採	2.8	—	—	—	
15	SSK105	II	表採 (第2号墳南 西墳丘裾)	2.5	—	—	2019年3月31日	第3次調査時採集
16	SSK3	II	表採 (第1号古墳 後円部西側斜面)	3.1	—	—	2019年9月7日	第4次調査時採集
17	SSK91	II	表採 (第1号古墳 後円部西側斜面)	2.5	—	—	2018年9月11日	第3次調査時採集
18	SSK36	II	表 採	2.4	—	—	—	
19	SSK15	II	表 採	2.7	外径推定32.0	—	—	
20	SSK80	III	表採 (第1号古墳 後円部北西側斜面)	1.2	内径推定22.8	内面指頭痕	—	
21	SSK159	III	h-2調査区	1.5	—	内面指頭痕	2021年3月26日	
22	SSK14	III	表 採	1.3	—	内面指頭痕か?	—	
23	SSK321・353	III	h-3調査区	1.6	内径推定28.4	内面指頭痕	2021年9月12日	
24	SSK366	III	表 採	[1.2]	—	—	—	粘土紐接合痕跡

のいう「補充技法」について、廣瀬覚氏は前期古墳に通有の技法として紹介している。それによると、廣瀬氏のI群円筒埴輪出現時からみられ、II群円筒埴輪での出現頻度は低くなり、III群には完全に用いられなくなるとしている(廣瀬2015)。今回の突帯I・II類の接合方法は基部となる粘土紐の上下に細い粘土紐を付加していく技術的特徴をもつもので、赤塚氏の補充技法と同様のものとみてよい。完成時には不可視的な製作技法であることから、畿内からの技術的伝播の可能性も考慮すべきであろう。ただし、現在のところ、これらの突帯破片の剥離資料は多いものの、いまだI・II類の突帯をもつ円筒埴輪自体の出土数が極めて少ないことから、突帯割付技法などの有無については確認できてはいない。

### c. 朝顔形埴輪・円筒埴輪突帯III類 (第11図20~24)

突帯端面中央が窪み、M字状に変形する幅広の一群である。突帯高は1.2~1.6cmほどしか

ない。これまでのⅠ・Ⅱ類のように複数の粘土紐を上下から貼り合わせた痕跡はない。むしろ横方向に2度ほど積み重ねて先端部端面を強く撫で窪めることで円筒部器壁面への密着、接合を図ったとみられる。第11図24（第12図画像）は表採ではあるが、粘土紐の接合痕跡を示す資料である。2つの粘土紐を貼り合わせて基部を形成し、中央に深く薬研堀状の溝を切り込んでいる。先端部となる粘土紐を貼り合わせ、端面を強く圧迫することで接合面積を増やして強い接着を図ったようである。

#### d. 3群の円筒埴輪について

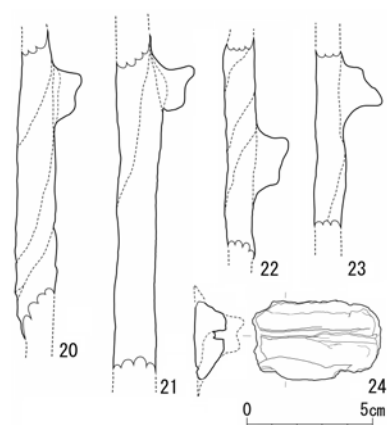
これら3種の突帯片はいずれも長者スクモ塚第1号古墳に樹立されていた朝顔形埴輪・円筒埴輪とみて間違いなからう。しかし、Ⅰ・Ⅱ類とⅢ類の技術的差異は大きく、それが円筒埴輪の製作集団の差異とみるか、あるいは製作時期の差と捉えるべきかは、今後の調査の進展によって判断していくこととしたい。とくにⅠ類は前期中葉までの古墳に樹立された特殊な小型朝顔形埴輪などの系譜をもつ可能性がある。器壁内面にヘラケズリを施す例からみても比較的旧相の様相をもつといえる。また、Ⅰ・Ⅱ類に共通してみられた上下から貼り付け合わせる突帯の補充技法に類した製作技術は奈良県西殿塚古墳やメスリ山古墳など、畿内中枢の前期中葉段階までに築造された大型前方後円墳にみられる円筒埴輪製作技術に属しており、限定的であるにしても技術伝播を想定することが可能になった。

しかし、一方でⅢ類には突帯内面の器壁内面には指頭圧痕がみられ、円筒部の器壁調整も異なる。多くは南東側「くびれ部」、h調査区付近での樹立を想定することができよう。今後これらの突帯の付設された埴輪の全体像を明らかにしつつ、安芸地方における埴輪の変遷についても言及していきたいと考える。（野島）

#### 7. おわりに

2020（令和2）年度から第1号古墳の発掘調査を開始した。長者スクモ塚第2号古墳の調査に引き続く。表採していた埴輪片に加え、南東側「くびれ部」（h-3調査区）には、あらたに3基の埴輪樹立痕跡（埴輪1～3）を確認することができた。円筒埴輪の内部には、地山に含まれる花崗岩の板状あるいは塊状の礫片を規則的に配置していたことが判明した。埴輪の倒壊を防ぐために丁寧な工夫をこらしていたことが確認できた。

また、前方部と想定した土層から鎌倉時代の土師質土器細片が出土したことから、これまで前方部墳丘盛土と想定していた部分は後世の土盛りによって形成されていた可能性が高く



第11図 長者スクモ塚第1号古墳出土朝顔形埴輪・円筒埴輪突帯断面模式図（2）  
20.SSK80 21.SSK159 22.SSK14  
23.SSK321・353 24.SSK366



第12図 突帯Ⅲ類粘土紐接合部分（第11図24（SSK366））

なった。i 調査区の最下層から出土した朝顔形埴輪の口縁部は内面断続ヨコハケを施し、高い突帯を巡らすもので、前期後半にまで遡る可能性の高い一群と把握することができよう。これにより、当該古墳の築造開始時期が古墳時代前期後半（4世紀中葉から後葉）にまで遡るとみる根拠をさらに増やすことになった。しかし、今回のような小規模なトレンチ調査では、墳丘の構築方法を明確にすることはできなかった。今後、後世の土盛りについて、その性格を明らかにし、墳丘形態を確定していきたい。

今回の概要報告は2021年度の野外考古学実習授業における遺構確認、土層断面観察・実測、写真撮影をもとにした。長者スクモ塚古墳群における調査研究は継続中ではあるが、第1号古墳の調査経過の報告をおこなった。長者スクモ塚第1号古墳の発掘調査を実施するにあたっては、広島県教育委員会村田晋氏にご教示をいただいた。また、東広島市出土文化財管理センターの石垣敏之・津田真琴の各氏には発掘調査に関してご指導・ご協力をいただいた。記して感謝したい。

なお、本研究報告は『古墳時代の首長墓系列に関する地域研究』と題する科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号19K01096〈研究代表者：野島 永〉）による調査研究成果の一部である。第1・7節は野島と有松、第2・5節・第6節（1）は宇野、第3節・第4節（2・3）は竹田、第4節（1）は舩越、第6節（2）は野島がそれぞれ執筆し、野島と有松が全体の文体を調整した。（野島・有松）

## 註

- (1) 広島大学文学部考古学専攻の実習授業（野外考古学実習A・B）として第6次調査をおこなった。なお、第6次調査の参加者は調査担当の野島永・有松唯の他、以下の通りである。  
**第6次調査（2021年度）**  
 広島大学学部生：宇野真太朗・小出来恒平・竹田千紘・森木 琉・岸戸康記・長崎 駿・舩越雅子・高田美玖・村上未紗・郷東知弘・住友翔馬・関谷紋加・津田朋洋・前田遼太郎・松村萌未
- (2) 整地土（第31層）、置土（第32層）に関しては、第5次調査（野島・有松ほか2021）のh-2調査区で断割りを行って検出したものと同様である。詳しくは「東広島市長者スクモ塚第1号古墳発掘調査報告（第5次調査）」を参照していただきたい。
- (3) 長者スクモ塚第6次調査報告は次年度実施された第7次調査の調査結果も一部踏まえて報告した。第7次調査ではi-1調査区の南側にi-2調査区を設け、第59層の直上から墳丘施設と考えられる石列が検出された。そのため、第59層は古墳時代の盛土であると想定できる。
- (4) 石材の判定は広島大学総合博物館学芸員の黒島健介氏より御教授をいただいた。記して感謝したい。
- (5) 土師質土器の年代に関しては東広島市教育委員会文化財係の吉野健志氏よりご教授をいただいた。記して感謝したい。
- (6) ただし、表採資料は摩耗している場合が多く、断面形状や粘土紐接合痕跡が不明瞭なものについては、分類から捨象した。
- (7) 上方に屈曲する突帯が付設された円筒埴輪は奈良県東殿塚古墳や大阪府玉手山3号墳、兵庫県長尾山古墳など古墳時代前期中葉以前にみることができる（松本編2000、安村編2001、福永編2008）。

## 引用・参考文献

- 赤塚次郎 1979 「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』90、古代学研究会、15～25頁。
- 石井隆博 1990 「まとめ」『森信第10号古墳発掘調査報告書』東広島市教育委員会文化財報告第15集、東広島市教育委員会、16～19頁。
- 石井隆博 1992 「助平古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)、東広島市教育委員会、81～97頁。
- 石井隆博・三枝健二編 2004 『史跡三ッ城古墳発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第42冊、東広島市教育文化振興事業団。
- 出野上 靖 2003 『原の谷古墳・原の谷遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第37冊、東広島市教育文化振興事業団。
- 恵谷泰典 1994 「原田岡山古墳群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』X、広島県埋蔵文化財調査センター、139～155頁。
- 大上裕士 1993 「才が迫遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』IX、広島県埋蔵文化財調査センター、19～44頁。
- 河瀬正利 1971 「藤が迫遺跡群」『広島県文化財調査報告』広島県教育委員会・広島県文化財協会、61～98頁。
- 河瀬正利編 1975 「蓮道第2号古墳」『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』広島県教育委員会、46～56頁。
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会、1～70頁。
- 是光吉基 1972 「豊ヶ崎古墳」『賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報』広島県教育委員会、11～13頁。
- 下江裕貴・永野智朗・藤澤昌弘 2018 「東広島市長者スクモ塚第1号古墳測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第10号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、41～70頁。
- 下江裕貴・村田 晋 2020 「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群の採集資料 一浄楽寺第37号古墳と七ツ塚第11・49号古墳一」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第9集、広島県立歴史民俗資料館、21～32頁。
- 鈴木康之 1990 「広島県における古代末・中世初頭の土器研究の現状」『土器からみた中世社会の成立』、「土器からみた中世社会の成立」シンポジウム実行委員会、137～140頁。
- 辻 満久 1990 「胡麻1号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』I（本文編）、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集、広島県埋蔵文化財調査センター、57～70頁。
- 成瀬敏郎 1977 「地形地域区分」『広島県史』地誌編、広島県、64～65・69～70頁。
- 野島 永・有松 唯・宇野真太郎・小出来恒平・竹田千紘・森木 琉・Rac, Carmen 2021 「東広島市長者スクモ塚第1号古墳発掘調査報告（第5次調査）」『広島大学大学院人間社会科学研究科考古学研究室紀要』第12号、広島大学大学院人間社会科学研究科考古学研究室、43～78頁。
- 廣瀬 覚 2003 「柳井茶臼山古墳の埴輪とその生産組織 一異系統埴輪共存の意義をめぐって一」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-2、立命館大学考古学論集刊行会、657～678頁。
- 廣瀬 覚 2015 「王権中枢部における埴輪の様式構造」『古代王権の形成と埴輪生産』同成社、23～81頁。
- 福永伸哉 1992 「近畿地方の小堅穴式石室」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊、大阪大学南原古墳調査団、129～160頁。
- 福永伸哉編 2008 『長尾山古墳第1次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室、真陽社。
- 藤岡孝司 1993 「大槓第1号古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ、東広島市教育委員会、78～90頁。
- 藤野次史 2003 「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ、広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、209～213頁。
- 藤野次史 2014 「安芸地方における土師質土器杯・皿類の研究（上）」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』

- 第5号、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門、1～52頁。
- 藤野次史 2015a 「東広島市丸山神社古墳群の測量調査」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第6号、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門、97～134頁。
- 藤野次史 2015b 「安芸地方における土師質土器坏・皿類の研究（下）」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第6号、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門、1～70頁。
- 古瀬清秀 1991 「安芸」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国四国編、山川出版社、92～94頁。
- 古瀬清秀編 2010 『千人塚古墳』東広島市教育委員会・広島大学文学研究科考古学研究室。
- 松崎寿和 1979 「古墳時代」『広島県史』考古編、広島県、424頁。
- 松本洋明編 2000 『西殿塚古墳 東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第7冊、天理市教育委員会。
- 道上康仁 1983 「奥田大池古墳」『奥田大池遺跡』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、43～51頁。
- 森 隆 1990 「畿内における古代後半の土器様相」『土器からみた中世社会の成立』、「土器からみた中世社会の成立」シンポジウム実行委員会、107～126頁。
- 安村俊史編 2001 『玉手山古墳群の研究』Ⅰ、埴輪編、柏原市教育委員会。
- 吉野健志 1998 「安芸国中世の土師質土器」『文化財論究』第1集、財団法人東広島市教育文化振興事業団、55～76頁。
- 脇坂光彦 1997 「御菌宇龍王山古墳の発掘調査」『芸備』第26集、芸備友の会、120～148頁。

第3表 長者スクモ塚第1号古墳土層観察表

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土					表土
第2層	暗褐色土	7.5YR3/4	弱	弱	上面は表土による有機質浸食を受ける。	自然堆積土
第6層	黄褐色土	10YR5/6	やや弱	強	砂質土ベース、5mmのクサリ礫を15%含む。 花崗岩バイラン土。	地山
第26層	褐色土	7.5YR4/6	なし	やや強	砂質土ベース、5mm以下のクサリ礫を15%含む。	盛土
第28層	褐色土	7.5YR4/3	なし	やや弱	砂質土ベース、4mm以下のクサリ礫を5%含む。	流出土
第42層	鈍い黄褐色土	10YR4/3	弱	強	砂質土ベース、3mm以下のクサリ礫を2%含む。	流出土
第43層	明褐色土	7.5YR3/4	強	弱	砂質土ベース、3mm以下のクサリ礫を1%含む。	旧表土
第44層	黄褐色土	10YR5/8	やや強	やや強	砂質土ベース、5mm以下のクサリ礫を2%含む。	盛土
第45層	鈍い黄褐色土	10YR4/3	やや弱	強	砂質土ベース、4mm以下のクサリ礫を5%含む。	流出土
第46層	明褐色土	7.5YR5/6	やや弱	強	砂質土ベース、7mm以下のクサリ礫を7%含む。	後世の堆積土
第47層	褐色土	10YR4/6	やや弱	やや強	砂質土ベース、8mm以下のクサリ礫を7%含む。	後世の堆積土
第48層	褐色土	10YR4/6	やや強	強	砂質土ベース、1mm以下のクサリ礫を5%含む。	後世の堆積土
第49層	褐色土	7.5YR4/6	強	やや弱	砂質土ベース、5mm以下のクサリ礫を5%含む。	後世の堆積土
第50層	黒褐色土	10YR3/2	強	弱	シルト質の土。	旧表土
第51層	褐色土	10YR4/6	強	やや弱	砂質土ベース、8mm以下のクサリ礫を7%含む。	後世の堆積土
第52層	褐色土	10YR4/6	強	やや強	砂質土ベース、4mmのクサリ礫を7%含む。	後世の堆積土
第53層	黄褐色土	10YR5/6	やや弱	弱	砂質土ベース、6mm以下のクサリ礫を2%含む。	後世の堆積土
第54層	褐色土	10YR4/6	強	強	砂質土ベース、7mm以下のクサリ礫を5%含む。	後世の堆積土
第55層	褐色土	10YR4/6	やや強	弱	砂質土ベース、5mm以下のクサリ礫を5%含む。	後世の堆積土
第56層	褐色土	10YR4/6	やや強	やや強	砂質土ベース、8mm以下のクサリ礫を5%含む。	後世の堆積土
第57層	褐色土	10YR4/6	やや強	やや強	砂質土ベース、7mm以下のクサリ礫を10%含む。	後世の堆積土
第59層	黄褐色土	10YR5/6	やや弱	やや弱	砂質土ベース、10mm以下のクサリ礫を10%含む。	盛土
第60層	褐色土	10YR4/6	やや強	強	砂質土ベース、3mm以下のクサリ礫を5%含む。	後世の堆積土
第61層	褐色土	10YR4/4	強	強	砂質土ベース、7mm以下のクサリ礫を5%含む。	後世の堆積土
第62層	褐色土	7.5YR4/6	弱	強	砂質土ベース、7mm以下のクサリ礫を7%含む。	後世の堆積土
第63層	褐色土	10YR4/6	やや強	やや弱	砂質土ベース、3mm以下のクサリ礫を5%含む。	後世の堆積土
第64層	褐色土	7.5YR4/6	強	やや強	砂質土ベース、5mm以下のクサリ礫を7%含む。	後世の堆積土
第65層	褐色土	7.5YR4/6	やや弱	やや強	砂質土ベース、7mm以下のクサリ礫を10%含む。	後世の堆積土
第67層	黒褐色土	10YR2/3	やや強	やや強	シルト質の土。	旧表土
第68層	褐色土	7.5YR4/6	やや強	やや弱	砂質土ベース、5mm以下のクサリ礫を5%含む。	後世の堆積土
第69層	黄褐色土	10YR5/8	やや弱	やや強	砂質土ベース、3mm以下のクサリ礫を7%含む。	後世の堆積土
第70層	褐色土	7.5YR4/6	なし	強	砂質土ベース、3mm以下のクサリ礫を10%含む。	盛土
第71層	鈍い黄褐色土	10YR5/4	やや弱	やや弱	砂質土ベース、3mm以下のクサリ礫を5%含む。	盛土
第72層	褐色土	10YR4/6	やや強	弱	砂質土ベース、4mm以下のクサリ礫を5%含む。	流出土
第88層	黄褐色土	10YR5/6	やや強	やや強	砂質土ベース、7mm以下のクサリ礫を5%含む。	後世の堆積土
第93層	褐色土	10YR4/6	強	やや弱	砂質土ベース、3mm以下のクサリ礫を1%含む。	後世の堆積土

**Excavation at Chōja-Sukumozuka Kofun No. 1, Higashi-Hiroshima City,  
Hiroshima Prefecture (6<sup>th</sup> Excavation)**

**Hisashi NOJIMA, Yui ARIMATSU,  
Shintaro UNO, Chihiro TAKEDA, Miyako FUNAKOSHI**

The Chōja-Sukumozuka mounded tomb group (*kofun-gun*) is located in Saijō-chō (Saijō Basin), Higashi-Hiroshima City, Hiroshima Prefecture, Japan. It consists of three burial mounds; however, one (No. 3) has vanished. In 2021, the Hiroshima University Department of Archaeology confirmed the presence of a row of ceramic funerary sculptures (*haniwa*) and rows of stones during the excavation of mounded tomb No. 1. Remains of erected *haniwa* were detected at three locations, and the intervals between the row of *haniwa* were sparsely arranged. Granite stones were stuffed into the *haniwa* which were elaborately fixed in place.

On the other hand, in the area believed to be the square (“front”) part (*zenpō bu*) of a keyhole-shaped mound tomb, *Haji* ware like pottery of the Kamakura period (1185-1333) was unearthed, and sedimentary soil of the medieval period was mostly observed. Therefore, the existence of a square part was doubted.

In addition, based on the date of the cylindrical *haniwa* excavated, it was estimated that this mounded tomb was constructed in the middle third to last third of the 4th century A.D.. The cylindrical *haniwa* can be classified into several types from the viewpoints based on the raised clay bands (*tottai*) and the base modifications, and it was found that there were differences in *haniwa* production techniques.

長者スクモ塚第1号古墳

図版第1



a. 長者スクモ塚第1号古墳h-3調査区全景（南西から）



b. 長者スクモ塚第1号古墳h-3調査区北壁土層堆積状況（南西から）



長者スクモ塚第1号古墳

図版第2

a. 第1号古墳h-3  
調査区埴輪1検出  
状況（南西上から）



b. 第1号古墳h-3  
調査区埴輪2検出  
状況（南上から）



c. 第1号古墳h-3  
調査区埴輪3検出  
状況（南上から）



長者スクモ塚第1号古墳

図版第3



a. 第1号古墳h-3  
調査区埴輪1掘り下げ  
状況（南西上から）



b. 第1号古墳h-3  
調査区埴輪2掘り下げ  
状況（南上から）



c. 第1号古墳h-3  
調査区埴輪3掘り下げ  
状況（南上から）

長者スクモ塚第1号古墳

図版第4



a. 長者スクモ塚第1号古墳 i-1 調査区全景 (北から)



b. 長者スクモ塚第1号古墳 i-1 調査区遺物 (第8図3・17) 出土状況 (北東から)

長者スクモ塚第1号古墳

図版第5



a. 長者スクモ塚第1号古墳 i-1 調査区土層堆積状況（北側、南から）



b. 長者スクモ塚第1号古墳 i-1 調査区土層堆積状況（中央、南東から）

長者スクモ塚第1号古墳

図版第6



a. 長者スクモ塚第1号古墳出土遺物（1）



b. 長者スクモ塚第1号古墳出土遺物（2）

長者スクモ塚第1号古墳

図版第7



a. 長者スクモ塚第1号古墳出土遺物（3）



b. 長者スクモ塚第1号古墳出土遺物（4）

長者スクモ塚第1号古墳

図版第8



a. 長者スクモ塚第1号古墳出土遺物(5)



b. 長者スクモ塚第1号古墳出土遺物(6)